

## 晃水・山本良吉の宗教観

松 本 皓 一

本稿は宗教的人格の比較考察をなす作業の一環としてのモノグラフであるが、山本良吉(旧姓金田)号晃水(一八七二—一九四二)の宗教観について述べてみたい。

山本は明治後期より昭和初期にかけての教育者として、また旧時代の価値体系を支えた実践倫理の指導者として、一部の人がとの間では良く知られている。しかし彼が特に宗教的に円熟した人格であるとか、またその宗教思想が学問的にすぐれた体系をもつと言うゆえんで、本稿の対象とされたのではない。あくまでも比較研究における比較肢の一つとして取りあげられるものであり、山本における宗教性は言わば比較の中の相対的な意義しか持たないのである。本稿は、その相対的意義に限定される山本の宗教思想、と言うよりもむしろ宗教観を主題にして述べるのが目的である。

山本の人間像については先に述べたことがある(日本宗教学会学術大会口述発表、一九八一年度於筑波大学)。また山本の人

形成に多くの影響を与えた師・北条時敬(廓堂居士)と友人西田幾多郎(寸心居士)との関係については、「廓堂・寸心・晃水—比較宗教人間学的位相—」と題し口述発表したことがある(比較思想学会例会、一九八一、十、於大正大学)。これらを踏まえて更にそれ以後の論として本稿を展開するが、前述の発表はいずれも口述に依るものなので、順序として若干の重複の避けがたいことを前もってお断りしておきたい。

山本は明治四年十月十日、加賀前田藩の旧士族金田基之直<sup>なお</sup>夫婦の三男として、金沢市鶴間谷に生まれた。のち終世の友人として交わる哲学者西田幾多郎、禅学の大拙・鈴木貞太郎、国文学者として名を成す東甫・藤岡作太郎をはじめ、天文学者の木村栄らが、この年の前年に生まれている。知られているように、このような近代日本の碩学たちが殆ど時を同じくして北陸の一角から輩出するには、後に述べる如く山本

もまた一時そこに学んだ石川県専門学校（のち改組されて第四高等中学校）の存在意義が大きい。

山本の生家は、維新後、士族の商売として始められた米穀商であった。物心つく頃には市内大樋町の金腐川の橋近くに住んでいたが、彼の記憶に残っている家庭は、毎日、父が長い杵を踏んでは米を搗いて売り、母が綿から糸を紡ぎ、それを染めにやって木綿を織り、それを以って生計を助けていたと言う光景である。兄二人妹三人がいたが、長兄孝太郎の夭折（溺死）後、一年ほどして移転した越中町時代は、子供達の成長期と物価高騰に加えて、内職以外に収入の途がなく、家計は最も困難をきわめていた。<sup>(1)</sup>

しかし山本は早くから才能をあらわし、右のような経済事情の中でも、兄と共に前記専門学校へ通わせられた。結局、中途退学となったが、多くの苦節を経て東京帝国大学文科大学選科（最初、法律、のち哲学倫理）を終え、石川県尋常中学校嘱託を振り出しに静岡・京都の中学校、京都帝国大学、第三高等学校、学習院、武蔵高等学校など多くの官・公・私立諸学校と関係を持った。

ここで注目すべきことは、山本はこれら諸学校で教壇に立つと共に、舎監（京都二中）、学生監（京大）、総寮長（学習院）、教頭・校長（武蔵高）と言うように、一貫して学生生徒の生活指導・訓育の部門を担当してきたことである。これは後述

するように、山本の宗教観がきわめて倫理的であることと無縁ではない。

このように山本が教育畑の道を歩むに至った背景には、先に述べた同郷の先輩かつ師である北条の誘掖や友人西田らの力添えがあったことが知られているが、それと共に、むしろそれを受け入れて、自らの問題として展開させていった山本自身の人間像をも重視しなければならない。

山本はきわめて個性が強く、自らの信念のためには少しの妥協も許さない、むしろ人間関係にあっては圭角さえ有りと言われた人物であったが、独自の教育理念をもっており、特に晩年、根津育英財団に関係してからは、その理想の貫徹に熱意をもって当った。衆目の見るところ、その態度は一種の宗教的信念で支えられているとまで言われた。

例えば武蔵高等学校時代の山本を識る人々に、彼の人間像のなかには「禅から来たもの」があると感得させたのは、その一つの証左であろう。

昭和三十九年六月、目黒八芳園において開かれた、山本の二十三回忌記念の座談会で、かつて山本と共に働いていた都築洋次郎と内田泉之助は、次のように回想している。

都築「…先生の修養も禅から来ているらしいですから、自分の功績とか何とか、そういうことは一切言われない。これ

だけの苦勞をしているなんていうことを言われぬ。そうして実際はやっているんですね。ですから先生に好意を示すのにも、いかに、あらわにあらわすのではない。あんまり言われぬ。あんなにおしゃべりの先生がですね。肝心のことはあんまり言われぬ」

内田「そういうことは確かにあるな」

都築「やっぱり禅の行き方を行かれたんだと思いますね」<sup>(2)</sup>

この短い引用文からは、山本がどの程度に禅者なのか、むしろ知るべくもない。しかし積極的外向型の気質で、本来「あんなにおしゃべりの先生」と言われている山本が、反面に持つこの寡黙性は、師廓堂・北条時敬における徹底した「黙」、二木謙三をして驚嘆感服せしめたあの「黙々の声」に奇しくも連なるものを思わしめる。北条の「黙」が単に性格的なものばかりでなく、禅的に円熟した人格の所産であることは、別なところで既に述べた通りである。詳細は拙稿「北条時敬における人間と禅」<sup>(3)</sup>を参照されたい。

さて、山本がいつどのようにして禅の修養をしたか、その具体的資料は余り無い。先にも述べたように衆人から禅者として評価された北条の提擲を受け、かつ山本の身边には西田や鈴木が存したことを併せ考えるならば、彼の生活領域に禅

的零囲気が濃厚であったことは十分に推察できよう。しかし、更に次の資料から山本自身もまた禅の道を志していたことが一層明らかとなる。

すなわち山本は、明治三十七年六月十二日と推定される鈴木大拙宛の書簡に

「：静坐も時には致せども一向に進みさうにもなし、非常の大々の不愉快ある時は一気呵成の感もあれども、其の不愉快が一寸外界によりて融和さるる時は静坐一向に進まず、空しく襖に向いて一時間も費す事珍しからず、鼻頭に大徳は列をなして居らるれども、さて持参する土産もなければ行く気にもならず：」

そして同じく九月二十一日、

「：西田氏は手紙によりて見れば、同氏は禅の修行大に進み、今は身心大に安静と成れりと。僕は始終其安静を求めて得ず、自己人物、自己手腕、自己頭脳一々人より劣る様に思はれて、何だか気がそわそわすることさへあり。修養せざりし罪とは申せ今更困り居候：」と書いています。<sup>(4)</sup>

当時、山本は三十三歳。鈴木大拙は三十四歳。すでに鈴木は明治二十八年円覚寺臘八接心にて見性し、三十年以来アマリカにあった。

西田もまた三十年代を通じて最も参禅に打ちこんだ。知られているように、寸心の居士号は明治三十四年三月十七日、

国泰寺雪門老師より洗心庵にて授かったものであり、三十六年には自ら内心に問題を残しながらも、とにかく京都大徳寺孤蓬庵にて無字の公案を許されている。Life が第一等のことであり、その実現のためには禅法を最捷の径と信じ、「所得ノ有無ニ関セズ一生コレヲ修行シテ見<sup>(5)</sup>」と動機づけられた西田の禅には、彼の言う soul-experience への憧れからくる悲壮な苦悩が漲っている。

このように、のち国際的な禅学の大家に成長してゆく鈴木や、自らの禅体験を哲学的思索によって体系化せんと悪戦苦闘した西田に比較するとき、山本の禅は、彼自らが「静坐」と言い、その静坐との取り組み方も「一向進まず」と告白するのように、自身にとってもさほど評価されるべき体験内容とはなりえていなかったと思われる。確かに山本は、端目には彼の同僚部下に対して禅の修養者としての印象を与えてはいるが、そして事実禅に志し、諸宗教の中でも特に禅に対する親和性を強く示しているが、山本の本質は、求道者として禅に入ってしまったのではない。初期において若干そのような傾向を見せたとしても、彼を貫くものは、禅と一定の距離をおく解説者の態度である。この態度は、禅に深く没入していった鈴木、不惜身命の一念で禅と格闘した西田と大いに異なる。一定の余裕を保つという点だけで言えば、むしろ北条に近いものがある。

北条は山本の性格上の短所を批判し惜しんだが、同時にその人間を愛し終生師として山本を導いた。山本もまた北条に随順し、教育者としての彼は、教育者北条の道をそのまま歩んだと言っても過言ではない。

だがしかし、山本の禅が西田や鈴木のと異なるように、北条の禅ともまた全く異なる。別稿ですでに述べたように、北条は禅の中に融けこみ、禅と共にあってしかも自らを失わず、悠々と禅を楽しんでいるかの風格があった。この余裕性は、禅の内に入っているの自受用三昧であり、山本のように一歩離れて対象化しているところに生じた余裕とは全く性格を異にする。

年長者である北条を除けば、山本・西田・鈴木たちが、同世代文化の脈絡の中でかなり緊密な人間関係を生き、同世代の悩みを分ちながら、何故山本は深く居士禅の中に傾斜することなく、つまり求道者としてでなく、生活指導者型の生き方を選択したのであるか。

経済的事情から早くより、生活規範を説かねばならぬ教育の場に職を奉じたことも、その一つの理由ではあったであろう。しかしそれは北条や西田とてもまた同じであった。その北条や西田とも異なる道を行かした諸要因のなかの有力な一つとして、山本の気質を指摘しておきたい。

気質 (temperament) は経験による可変性を無しとはしないが、体質 (constitution) と同様、先天的な要因によるところが多いとされている。人格形成には社会・文化的要因は大きい。気質はそれらから影響されながらも、なおそれらを受容する際の個人差インディヴィデュアリティを支える生理・心理的基盤を成すものである。言う迄もなく気質は万能ではなく、或る限界の中において、人間の行動に方向を与えるものである。

気質は外的行動の観察や無意識領域からの投射、体型との比較類型学的考察等によって推察し得るとされるが、山本の気質の一端を窺い知ることのできるのは、明治二十二、三年つまり十八・九歳当時の山本に対し、北条や西田から出された書簡文である。

例えば、山本は明治二十一年(十七歳)七月十日在学中の第四高等中学校退学を余儀なくさせられるが、このことに関し北条は、山本の才能を惜しむと共に直情径行の客気を警告して西田宛に次のように書いています。

…小生嘗テ金田氏(註、改姓以前)ノ終ニ学校ニ容レラレザルヲ惜ム、既ニ大厦高堂ニ昇リ敢テ自ラ居処ヲ小ニシ以テ此敗ヲ取ル。氏自ラ省ルナラバ盡思半ニ過ギン。金田氏ハ学力豊富ニシテ徳アリ、夫ノキツツク長上ヲ凌グガ如キハ即チ非徳ノ一端ニ顯ハルルナリ、金田氏若シ意ヲ致シテ徳ヲ養フヲ勉メバ何ノ幸カ之ニ如カン。若シ果シテ然ランニハ小生其学ニ富ムヲ取り彼

氏ノ為メニ一進路ヲ開カン……(6)  
また、別の折には、同じく西田宛に山本を評して書いています。

貴君ノ同級人多シ、能ク人に嫌ハルル者ハ金田氏ナリ、氏ニ望ミヲ属ス可キ処アリ又或ハ多ク過タン乎ノ処アリ、卵子ハ円クシテ圭角ナシ。是レ時ヲ俟テ耳鼻口支体臟腑美毛妙音ヲ生ズルノ象ナリ、氏ハ齷齪異論多ク意見常ニ荆棘アリ、童顔如棗其徳潤沢氏ハ之ヲ知ラズ：

つまり北条は、山本の将来を憂い、やゝもすると人間関係において過激に走り円滑をかき易い性格の猛省を、西田を介し促しているのである。

その西田が、明治二十二年三月十三日、山本に宛次のように書いています。

…君何とて少しく御願遊はされず候や、能く兵に將たるものは進縮自在、以て其兵を損せず能く敵を制す。急進願みざる者は野猪のみ。君少しく思へ Great men は Sudden fight にて達せしものにあらず。

ここには退くを知らない前進主義、いな急進主義に対する忠告がある。Sudden fight' この一句は、山本の性格を端的に言い表しているよう。若き日の山本に対し、北条が「温厚重厚ノ風ニ乏シキ」「人ト謀リテ自個の意志思想ヲ惜マズ之ヲ陳ブル」と言い、西田が「急進願みざる者」と言った積極的外向型の性向は、のちの武蔵高校時代においても学生に

対し、安易な満足・完成に妥協せず「安住の処は常に千里白雲の外にある」と説いて、その理想主義的潔癖さが、時には酷にすぎるほどの厳しい印象を与えている。この点、同じ理想主義でも自己の内面に沈潜していく西田とは違いがあった。

その他さまざまな複合諸特性が、山本の人間像にみられることは言うまでもない。

しかし右にみた気質的特質は特に際立っており、それが十七・八歳当時、精神不朽論を唱えて一種の神秘主義的有神観に立ち、当時無神論者であった西田以上に宗教的であったと云える山本が、西田と同様不遇な青年時代(尋常中学教師時代)を経つつも、西田のごとく内向的求道型の生でなく、やがて生活倫理指導型の人格構造へと転回してゆく一因と見る事ができよう。それがまた哲学者として宗教を思索する西田と、教育者として宗教を叙述する山本と分れるところであったとも言える。したがって山本には、宗教哲学はない。あるのは宗教観である。あるいはその宗教観にもとづく彼の宗教信仰であるが、その宗教観が次に述べるように、実践倫理と結びついた合理的性格が強いものだけに、その信仰は禅への親和性を見せながらも、禅宗教団を含め伝統的な宗教儀礼信仰にはきわめて批判的である。以下、山本の宗教観について述べたい。

山本の著書は倫理学、とくに中等教育・国民教育の実践倫理に関するものが多く、多種多様な論説や随筆・時評においても、教育に関するものが圧倒的量を占めている。しかし宗教についての論述もあり、その中でも彼の宗教観を知る上で特に重要なものは、次のものである。

「宗教の四義」 宗教、十二巻 明治三十年

「宗教辨」 宗教 十三巻 明治三十年

「宗教と道徳」 六合雑誌 二二七号 明治三十二年

「教育家と宗教」 教育学术界八八 明治三十三年

これらをみると、山本が言う「宗教」なる語には、主として、特定の宗教体験を基に開創された創唱的宗教―しかも長い伝統と洗練された教理体系、すぐれた宗教文化をもって現に広く流布されている *universal religion* としての仏・回・基と、山本自身の風土に密着した民族宗教・神道とが強く想念されている。むしろ山本は宗教学上のティポロジーから把握しているのではなく、すでに「聖」なるものと認されている宗教的人格やその教説に対し、倫理学者教育家として志向したのであり、明治国家体制下の日本人としての民族的自覚を反映させたものだと言ってよい。

そこで山本が明治三十年代初期(年齢二十代後半)までに、宗教とどんな関わり方をしてきたかを概観してみよう。山本の幼少時代には、まだ儒教的修養の伝統が強く残存してい

た。旧武士階級の末裔である山本は幼くして「深く孔教に感  
じたり」と記している。

その後、国体論を読んで神道論者になったが、これには欧  
化思潮の反動として抬頭した国粹主義の世論と、父基之が以  
前より篤信な神道家であったことが影響していよう。しかし  
教理的に無内容な神道にたえることができず、この期間はき  
わめて短かったと記している。

但し、山本における信念の強さは、一時期ではあれ神道信  
仰にかかわったというこの一事と、全く無縁ではないと思わ  
れる。

その後一転して基督教に移り、山本は米国より来日した牧  
師につき少しは新約聖書を研究したと言う。聖書を識るに及  
んで「文明人の動機力となるものは、ただこれのみ」と、  
毎日曜日会堂に通って、やがては洗礼を受けようとまで決意  
したと言う。明治青年の憧憬的であった西欧文化と表裏一  
体化してもたらされた基督教は、まさに新時代の宗教として  
朝野の注目を浴びていた。しかし山本には受洗を決断する迄  
の決定的な体験、つまり回心はおとずれなかった。ただこれ  
によって、儒教や神道と言った伝統的な宗教価値から解放さ  
れ、「哲学に関する諸書を修め、吾精神上の修練を是と、一、  
三の高潔なる文学者の著書とに得、吾信念少く固まらん」と  
と記すように、ともかくより広い世界への開眼が為されたこ

とは確かである。<sup>(10)</sup>

これは明治中期の知的青年像に見られる精神的彷徨の一つ  
のパターンであるが、山本の年譜にも「二十三歳（明治二十六  
年）で人生観（誠）につき悟りを開いた」とあるのは、この  
ような心的変化をさしているのであろうか。明治二十五・六  
年のまじわりのころは、山本は二十二、三歳。石川県共立尋  
常中学校嘱託を依願退職して上京、帝国大学選科に入った頃  
である。

この頃の山本には、現状への不満はあったが、その不満を  
解消するべく決断して上京、大学選科での勉学に未来を賭け  
たときである。そこには抱負こそあれ、絶望や挫折感むろん  
罪悪感などは存しない。基督教信仰への回心よりも、むしろ  
前年、円覚寺釈宗演について参禅している鈴木や西田の世界  
に同調する気運こそ強かったと思われる。

「今は禅に由りて我安心の地を得んと欲すれども性の短か  
くして意の弱き自家の光明に接する能はず」と書いて<sup>(11)</sup>いるの  
は、短慮で意志薄弱と自覚しながらも、参禅を志していた証  
拠である。

こうして山本は、明治三十年には、宗教上では禅を一つの  
到達点としている。

しかし山本は、この禅をもって、世の人一般が思うような  
唯一信仰の対象としての「宗教とは謂はず」と言っている。

何故と言えば、禪に限らず他の諸宗教すべてが、皆悉く存在の意義があり「不可なき者」だからである。

こうして山本は、諸宗教の存在理由を肯定する。「我社会目下宗教の必要最も大なり」との認識が、山本の宗教観の大前提であった。その宗教とは諸宗教である。言いかえると、諸宗教をつらぬく抽象的な宗教一般なのである。しかしこれが反面、山本が深く一つの宗教へ信仰として入れなかった理由ともなった。

山本の立場は、とくに強く自らの宗教信仰に関わるものでなかったが、宗教の重要性を強調こそすれ、決して否定するものではなかった。山本は「余は諸宗教の宗教学道に一たび眼を注ぎて而も少しも之に入る能はず。入る能はざれども敢えて之れに反対せず、諸教道の外に在りて之と共に歩まんと欲す<sup>(12)</sup>」<sup>(12)</sup>と云うのである。言わばこの態度は、宗教肯定論に立ちながら、しかもいかなる宗教的価値からも中立の立場にたっている。ここには近代宗教学的な価値中立の立場と言うよりも、むしろ宗教全般を肯定する実践倫理の教師像が反映されていると言えよう。したがってこの宗教的価値中立の態度は、先に述べた禅への親和性とも、また後に述べる基督教への心情的傾斜とも深く矛盾するものではない。

右のような宗教的価値中立の立場から山本は、宗教を明ら

かにする上で重要な四つの問題点があるとす。すなわち、目的、終極、教義、儀式の四義である。

一、目的とは教祖が教えを説いた精神、つまり開教立宗の理想である。

二、終極とは、その教えに基づく信仰や修行によって到達する究極の境地である。

三、教義はその終極の安心を説く教理の体系である。したがって信仰上の絶対の価値体系であるが、山本の場合、教義として重視されるのは、教えの内容（教理）と共に「教えの立て方」である。言いかえると山本による教義では、時と処とを論ぜずドグマとしての絶対性を固執することよりも、社会人心に適應しうるような教義の「立て方」が重んぜられている。この時、山本の脳裡には後に述べるように、最もミッシヨナリな宗教である基督教があつたと思われる。当時、基督教教義と我国国体観との間に、教育と宗教の衝突と称せられた緊張関係のあつたことは知られていよう。

四、山本はあえて儀式と言わず儀式と言う。彼によると、人間は抽象的なものを感得することは至難なので、しばしば具体的なものに表現しなければ満足しない。これが宗教に適用されたときが儀式である。ここには一種シンボリズムに近い見方があるが、ただこれは「下等の智識の人にのみ主に必要であり」、知識の進歩向上と共に減滅するものという見解



には、そのシンボリカルな考え方にも限界がある。山本は特にいわゆるの儀礼主義 (ritualism) にはきわめて批判的であり、葬礼や祈禱等は宗教の必要部分にあらずとし、現今の「宗教中、多少は反宗教的要素の含まるるを是認すべし」と言っている点を見ると、儀式は、彼の言う宗教の四義ではあるが、現状の宗教において「是認せらるべきもの」となる。つまり、彼の抱く理念型の宗教においては消滅すべきものである。山本は「儀式について余は多く言ふを欲せず」と述べている。

以上の四点には、なお若干の問題が含まれていよう。

言う迄もなく山本の宗教観の中には、先述したように世界宗教としての仏・回・基と、自国の民族宗教である神道とが強く想念されており、原始宗教 (primitive religion) 等についての配慮は特にない。つまり彼が宗教学者でなく倫理学者であり、それ以上に教育者として、文明社会における宗教の存在意義を実践倫理の上から評価強調する立場にあったからである。第一義として「目的」をかかげたことは、いずれにしても宗教がもつ人間における倫理上の有効性が意識されているためであろう。したがって山本の宗教観には、いわゆる ethical religion としての傾向が強く、かつジェイムスが分けた古典的な二分法の institutional religion に対する personal religion が重視されている。<sup>(14)</sup>この点が、先に述べ

た通り儀式軽視の方向につながることは当然と言えよう。

宗教が、人間の問題の究極的解決を目ざすものであるとは良く言われる。他力の救済であれ自力の証悟であれ、人間に究極的安心の境地を説かない宗教はない。第二義の「終極」は、単に「目的」と言う開教立宗の理念とは別に、人間の側において到達される、問題解決の心的境地を重んじているのであり、この psychological な傾向は、当時としては一つの目新しさを感じさせる。だがしかし、この「終極」なるものが、後、ティリッヒによって言われる ultimate の概念と異なることも言う迄もない。ティリッヒでは到達された境地のごとき静態的なものとしてでなく、動的な「関わり」(concern)として実存的に捉えられている。<sup>(15)</sup>

第三の教義において山本は、ドグマとしての絶対性よりも、言わば現実における適応性の問題を重視した。これは先述の通り、明治二十年代後半からの教育と宗教の衝突という時代背景を考えねばならない。山本の師北条もまた日本的基督教の必要を説き、それは基督教自身のためだとも言っているが、山本の基督教観も全く北条と軌を一にする。

当時、海老名弾正のように基督教界の一部にも国風化の傾向があったが、一神教の基督教が多神教ないし汎神観の我国風土に同化することは至難なことであり、かつ、教義を歪曲までして教線を拡大することは、純粋な宗教信念にとって許

されないことであった。

伝道者が純粹に教義を布衍しても、それが伝道の場での接触・土着化の過程ではさまざまな変容をとげることはあり得る。異文化間において、文化変容のこの現象が特に顕著なことは言う迄もない。それが伝播の実態である。

しかし最初より外来宗教に対して、受容側からこれを要求することは、言わば自国文化中心主義・文化的エゴイズムであって、一種のナショナルリズムからするチャリンジである。

しかし山本は、教義もまた「時・処を論ぜず固執することは不可」とし、「社会人心に合うようにするべし」と提言した。

「基督教が真正に我国に入らんとしなば、我国想と合し其儀式をば日本風とせずば能はざるべしと余は昨年(註、明治三十年)九月の「宗教」に論じたり。今の諸宗教に関する吾考は今も変わらず」と言うのが山本の意見である。この意見を容れぬ基督教に対し「Zeitgeistを知らず<sup>(16)</sup>」と言っている。

この点でもまた山本は、北条と同じく教育者、しかも明治国家体制下の教育者であったことを思わざるを得ない。

しかし反面、山本は宗教に対して全く固々なナショナルリストではなかった。彼は、宗教的安心は「全く国家的ならざる所に存す」と言っている。「実に国家以上のものなり」とも言うのである。

しかしこの事は、反国家的なることを意味するのではない。山本によると、宗教的安心は「国家及び国家的組織制度等と相戻らず、而も之れに依る者に非ず」して、このようなものを越えた全く個人の内的世界の問題となる。つまり、これこそが宗教的安心の非国家的、誤解を避ける表現を使えば超国家的なるゆえんであり、それゆえ非国家的なるからこそ逆に国家に利益することもあり得ることになるのだと言う。

「宗教的安心をば非国家的故に反国家的なりといふ者は抑も何の理ありてか<sup>(17)</sup>」と言うところには、ナショナルな体制の内限定してではあるが、山本におけるリベラルな宗教観を見ることができよう。

山本が組織化された教義体系や儀礼形式よりも、個人内面の信仰や体験を重じたことは先にのべた。宗教儀礼の構造や機能が宗教社会学的に明らかにされていない当時において、山本の言う「儀式」が「下等の知識の人にのみ主として必要なもの」と感ぜられたのは無理がないとしても、「今後の宗教が儀式から脱却せんことを望む」と言うのは、やはり宗教に対する一面的な見解である。彼が、十六世紀の宗教改革は「儀式」打破の運動であるとし、また坐臥進退、道は到る処にあると言う禅の如き、何処にか儀式あらんと言っているが、ここには徒らに理念型としての宗教のみを想定し、現実を無視したものがあると言わねばならない。

さて、山本は明治三十一年（二十七歳）の二月稿という「宗教辨」の中で、次のように書いている。

明治二十九年夏、余は宗教に関する私見を「如是」といへる雑誌に投じ、宗教は諸觀念の最高調和なりといへり。今にして之を觀れば、これ宗教と哲学とを混同せる者、断じて誤る。觀念を分析綜合するはこれもと哲学の事にて、之を為すには全く論理的手続きによる。…中略…觀念研究は知識的事、知識的事の容易に安心を与ふるを得ざるや、人心は則ち宗教に向う。宗教は此我を捨てて彼大我と合せしめ、由て以て自家の本領を明らかにし、根本的大安心を与ふる者。<sup>(18)</sup>

これによると、大学選科で哲学倫理を学んだ山本の初期における哲学と宗教についての考えを知ることができるが、当初山本は、かなり知的要素の強い宗教観を抱いていたことが判る。つまり宗教とは、個々片々の觀念を根元的に統一する最高知恵と考えていた。むしろこれは仏教で言う Prajñā の知恵ではない。山本はむしろ最高觀念としての宗教を哲学専攻の理性をもって、知的に分析しようとしていた。そしてその破綻が明治三十一年の初めに現われたことを、右の引用文が物語っている。

しかしその破綻の結果、突如として、大我に合するとか自我の本領を明らかにする…云々の、一見して仏教的ないし禪的な宗教観が出てくることは意外に思われよう。だが、その下敷きはすでに用意されていたのである。

先に述べたように、山本の「静坐」を含めて西田や鈴木らの坐禅はすでに始まっていた。

山本が前出の文を書いた前年（明治三十年）、西田の参禅熱は最高潮に達し。雪門、滴水、廣州、虎関ら各禅者を歴訪し、七月には妙心寺の大接心に参加している。その前々年（明治二十八年）には、すでに長く坐ってきた鈴木が円覚寺で見性している。

明治三十年を前後するこれらの事實は、あながち偶然のみは考えられないものがある。すなわち北陸の地から上京して、同じように大学選科に学んだ山本・西田・鈴木の人間関係の力学の中で——むしろその先駆的な、かつ刺戟的な役割りを果たしたのは鈴木であり、更にその背後には北条の存在があったが——禅への関心が、彼らの間に、すでに熟成していたことを示している。具体的に禅体験の資料を残していない山本にしても、その渦中にあつた。以後山本の宗教観は、禪的な表現で語られることが多くなるとは言え、山本の人間像が全く禪的変容をとげたのではない。諸宗教（禅を含め）が禪的な表現で語られたということである。そこに、鈴木や西田に比して、山本を禅者とのみ言えない限界がある。

山本において、觀念の論理的研究は哲学であり、宗教は生きる上の安心を与えるものであつたが、道徳と宗教との関係

は如何であろうか。すでに見てきたように、山本の宗教観の特色として、倫理的性格の強いことが目立った。その倫理的性格の強い宗教を、山本は倫理学と明確に区別する。つまり両者一見して如何に密接な関係があっても、倫理学は畢竟觀念の学であり、安心を与えることはできない。元来、道徳は意志の世界の問題であり、宗教は無意志の世界に属する。したがって宗教は道徳の終るところに成立すると言う。宗教は道徳の果しえない機能を補完すると言うのであろう。

山本の立場は、基本的には進化論にたち、絶えざる人心の発達を説く。たとえば宗教的厭世主義も、単なる寂滅主義としてでなく、厭世は一步楽天の上であり、これを一步進めれば無厭世・無楽天の境地を経て遂に厭世即楽天の真の宗教的境地に到達すると言う。第一段階の楽天家よりすれば最後の到達境地も必ず絶対的厭世と見えようが、宗教の対するところは、大死一番して此の真の世界を見ることにある。故に真の厭世は、この世を厭うものにあらずと言う。また永遠不滅の来世も、同様な筆法で、比の世の外にはないと言っている<sup>(19)</sup>。

この思弁的な宗教観は、同じ觀念論でも西田のそのような内向化した晦渋さがない。きわめて健全な理性の判断に立っている。

しかしこの健全さは、むしろ深い宗教体験の裏打ちを欠くことと関係があるのではなからうか。西田の場合は、思索と、

悪戦苦闘する宗教体験の連続があった。それが觀念論とは言え、彼の思想体系の息づまるような論理的難解さと重圧になっている。西田哲学の是非は別にして、この緊迫感がかつて一つの魅力であったことも事実である。

ところで、山本の場合、彼はいわゆるの思想家ではない。また世に言う宗教学者でもない。前に述べたように倫理学者・教育者として世に立ち、むしろ実際的な学生指導の面で識られてきた人物である。この山本の宗教観を、宗教プロパの領域で評価することは酷な面があろう。本稿は最初より山本自身の宗教観の学問的意義を論ずるのが目的ではなかった。あくまでも宗教的人格の比較考察の比較肢の一つとして取り上げたにすぎないのである。

北条・西田・鈴木・山本と言った群像の人間関係の中で、山本が比較宗教人間学的にどのような位相を占めるかは甚だ興味ぶかいものがある。それはまた別稿にゆずりたいが、最後に一つ考えてみたいのは、山本の宗教観がそれなりに持つ意味である。

山本の宗教観は表現としては仏教的・禅的用語に富んでいるが、基本的には如何なる宗教にも価値中立の立場をとっている。

彼にとって宗教とは、小我を去って大我と合することであ

るが、この大我は、とき・ところ・人種・風俗・国情その境に従って、いかようにも変化相異があつて差つかえないと言ふ。諸宗教つまり宗教の多様性は、この大我と認めるものの差異によることになる。大我の内容は必しも仏教的とは限らない。

このように寛容な宗教観が、一宗教に徹底直入する宗教体験を稀薄にした一因と考えられる。それが宗教信仰者としての円熟を、山本にもたらず限界となつたことは先に述べた。

同時にまた、諸宗教を肯定的に同視する宗教観が、倫理学教師としての職責と絡んで、山本をして宗教の解説者の態度をとらしめた。<sup>(20)</sup>

山本には「宗教」三十一号三十二号に連載した「<sup>モヘイット</sup>回々教大意」<sup>(21)</sup>ほか基督教についても若干の概説の時評がある。「回々教大意」は明治二十七年の原稿であるが、簡潔で要を得た當時としては優れた案内書である。

解説には当然対象との間に距離がなければならない。求道者として宗教の中にのめりこむこともなく、有用な諸宗教として対象化することができたのは、彼の人格が絶えず理念を追う生活指導型の教師構造であつたからである。その人格の形成過程については、本稿は省略した。それは別の所で既に述べたからである。

かつて宗教については、少数の例外は別として殆んど批判

らしい批判の生まれなかつた我国であるが、明治初年、信教の自由が認められ、開国と共に西洋の近代思想がもたらされると、例えば明六社グループに代表されるような人々によつて、さまざまな宗教議論が展開された。その中には、功利主義や進化論、唯物論などの合理的視点をもつて無神論を主張し、あるいはまた、外来の新宗教を新時代の宗教として主張し、伝統的宗教を批判するものが少くなかつた。むしろ、これらに対抗する反批判もあつたが、明治十年代の宗教界には、これらを鎮静し統一する大きな力はなかつた。

こうした宗教界の乱調した気運は、やがて二十年代のリバイバルや改革運動など疾風怒濤期の宗教的要求へ高まると共に、他方ではむしろ冷静に、宗教を学問的に明らかにしようとする必要性を自覚させた。井上円了（哲学館）、井上哲次郎（東京帝国大学）らが二十年代早々に相前後して、宗教学ないし比較宗教学の講座を開設したことは、このことを物語つていよう。こうした宗教の学問的研究の気運は、やがて明治二十九年の比較宗教学会創立へ結集されて行くが、このように見ると山本の宗教観は、いまだ日本における宗教学の揺籃期であつた。彼の宗教観は今日特に評価されるべき内容は持たないが、この時代に諸宗教を幅広い視座から、健全な実践的常識としての宗教観を説いたことは注目されよう。それは深遠な哲学や禅学・仏教学を説いた西田、鈴木と対比すると

き、三者の人間関係の中で特に注目されるのである。

註

- (1) 幼少時の回想は、「五十回顧」「二十六年」「七十自適」(晃水先生遺稿所収)による。山本の資料には、『晃水先生遺稿』一九三一・故山本先生記念事業会、非売品。『晃水先生遺稿・續』一九六六、山本先生記念会、非売品がある。以下『遺稿』・『遺稿・続』とする。
- (2) 『遺稿・続』七八九頁
- (3) 「駒沢大学仏教学部論集」
- (4) 『遺稿・続』七八頁以下
- (5) 明治三十五年十二月二十四日日記、第九号所収『西田幾多郎』『全集岩波・旧版』(以下『全集』)別巻一
- (6) 西田幾多郎編『廓堂片影』一九三一、(以下『片影』)三一頁
- (7) 『全集』別巻V
- (8) 『遺稿・続』七五三〜四頁
- (9) 『全集』別巻V、三頁以下  
「…余ハ今日君ノ精神不朽ノ事ヲ論スルヲ讀ミ又一ノ愚考ヲ惹起セリ…云々」とあり、当時元素をもって世界構成の因子とみていた唯物論的無神論の西田から山本は一種神秘的な靈魂の不滅論をもっていたと批判されている。
- (10) 『遺稿・続』三一八頁以下
- (11) 同前
- (12) 同前 三一九頁
- (13) 同前 三三六頁

晃水・山本良吉の宗教観(松本)

- (14) W. James: The Varieties of Religious Experience. 1901. The Modern Library. p. p 30-31.
- (15) P. Tillich: Systematic Theology Vol. 1. 1953. p. p 14-15.
- (16) 『遺稿・続』三二六頁
- (17) 同前 三二九頁
- (18) 同前 三二六頁以下
- (19) 同前 三三二頁以下
- (20) 同前 三四九頁以下
- (21) この点は、同時代を、いわば求道者として生きた清沢満之、高山樗牛、綱島染川らと本質的に異なる。むしろ啓蒙主義宗教観の延長上にあるとも云える。

山本良吉(対北条・西田・鈴木)略年譜

年号	山本良吉	北条・西田・鈴木
一八七一年	出生、父金沢前田藩旧藩士金田基之 母なお	前年、西田、鈴木、藤岡出生、廃藩置県
明治四年	六歳 金沢越中町へ転居	
一八七七年	この頃、家計窮迫す	
明治十年	七歳 小学校入学	西南の役後のインフレーション
一八七八年		
明治十一年		
一八八四年	十三歳 石川県専門学入学	紙幣整理のため農村不況深刻化、北条時敬、金沢へ着任
明治十七年		
一八八七年	十六歳 第四高等中学校	井上円了、宗教学を開講

明廿年 在学

一八八八年 十七歳 同校予科退学、

明治二十一年 大谷中学奉職

一八八九年 十八歳 憲法発布の日、

明治二十二年 西田、松本文三郎、藤岡作太郎らと記念写真

（頂天立地自由人の書をかかげる）

一八九〇年 十九歳 石川県立尋常中

明治二十三年 学嘱託となる

一八九一年 二十歳

明治二十四年

（哲学館）

井上哲次郎、比較宗教学

を開講（東京帝国大学文

科大学）、北条、円覚寺に

て参禅、竹塙居士号（四

月）

西田、北条より山本への

忠告を依頼される（五月）

西田幾多郎、鈴木大拙上

京

西田帝国大学選科入学、

北条、第一高等中学校教

諭

鈴木、鎌倉で参禅

西田・鈴木ら円覚寺で参

禅

久米邦武「神道は祭天の

古俗」の論文

鈴木、大学選科に入る

北条、山口高等中学校教

授

日清戦争

一八九五年

明治二十八年

二十四歳 「自由意志と

倫理学」ほか

帝国大学文科大学選科

終了（二十九年説あり）

中等教員免許状（修身

倫理・教育・漢文）

一八九六年 二十五歳 京都府尋常中

明治二十九年 学校教諭兼舎監となる

母なお逝去（四月）「支

那倫理」（宗教）ほか

一八九七年 二十六歳 静岡尋常中学

明治三十年 校

教諭兼舎監

「倫理学史」（富山房）

「基督教と現今の社会」

「宗教の四義」（宗教）

ほか

鈴木との書簡往復多し

北条より書簡にて反省

を求められる（三月）

一八九八年 二十七歳 小沢きくと結

明治三十一年 婚（三月）

「倫理学要義」（普及社）

「道德基礎の改易」（宗

教）「社会上の一改易」（六合雑誌）「基督教の復活」（日本人）ほか

鈴木大拙、円覚寺接心で見性

西田、第四高等学校講師

姉崎正治ら、比較宗教学

会設立

鈴木大拙渡米（シカゴ）

して、ポール・ケーラス

の中国文献英訳を手伝う

西田、山口高等学校へ赴

任、参禅熱高まる

藤岡、第三高等学校へ、

京都帝国大学新設（七月）

北条、第四高等学校長と

なる

西田、妙心寺僧堂に参禅

（「史海」）

回々教大意（宗教）

東京本郷に居を構える

める。評論「ルソー」

この頃、人生に開眼すと

云う。

一八九三年 二十一歳 上京（九月）、

明治二十五年 帝国大学選科入学（法

科のち哲学科）

一八九四年 二十三歳 山本なをの養

明治二十七年 嗣子となり山本姓を名

一八九九年 二十八歳 長女(はじめ)誕生(一月)

明治三十二年 「家族の発達」(六合雜誌)「修身教授と教師の覚悟」「教育家と人間てふ念」(教育時論)ほか

一九〇〇年 二十九歳 京都府第二中学創立に参与、教頭に就任する

次女ふみ(誕生)(八月) 『実践倫理要義』刊行 「真宗教をば難すべからず情落せる宗教は難すべし」という 『教育家と宗教』(教育学術界)ほか

一九〇一年 三十歳 長男(誠)出生

明打三十四年 『実践倫理礼法篇』(京都五車楼)、「基督教徒といふ名」(六合雜誌) 「新世紀における我国基督教の運動について」(同)

一九〇二年 三十一歳 長男誠、死亡

西田・四高教授となる  
私立学校令公布(八月)  
文部省、教育と宗教の分離を訓令  
仏教清徒同志会の新仏教運動おこる  
足尾銅山被害民、警官と衝突(二月)  
藤岡作太郎、京都帝国大  
学助教授となる  
内村鑑三「聖書之研究」  
発刊  
鈴木、釈宗演と共同で『静坐のすすめ』(光融館)  
清沢満之「精神界」発刊  
植村正久、海老名弾正の間に神学論争  
西田、雪門老師より寸心の居士号(三月)  
西田、「現今の宗教について」(無尽灯)  
北条、広島高等師範学校  
校長(五月)

父、基之死亡(八月)  
一説では(三十四年八月)

一九〇三年 三十二歳 三女みち誕生

明治三十六年 (六月)  
京都堀川、本国寺一音院に移住  
『実践倫理医術篇』  
「教育の制服」(教育時論)

一九〇四年 三十三歳 京都市坊条通

明治三十七年 仏光寺に転住、大拙への往信目立つ  
「：静坐も時に致せども一向に進みさうにもなし：」と書く

一九〇五年 三十四歳 本立院に転居

明治三十八年 「日本特有の文明の消滅を以て日露戦争の果となすに至らんことは深く今よりして考えおくべきことなりとす：

西田「Life」が第一等のことなり(二月)

仏教青年伝道会設立(十二月)  
大谷光瑞、中央アジア探險に出発  
前田慧雲、大乘非仏説批判(大乘仏教史論)  
西田、大徳寺にて無字の公案透過

日露開戦(二月)

日本宗教家大会開催(五月)  
姉崎正治「現身仏と法身仏」  
西田の実弟、旅順にて戦死  
綱島梁川、見神の体験

ペテルブルグの血の日曜日(一月)  
木下尚江「火の柱」  
西田、国泰寺に参禅(七月)  
藤岡『平安朝文学史』刊



一九〇六年  
明治三十九年

三十五歳 四女せつ誕生  
「ハイカラ主義を標榜せし小生共も今は少し日本其物ニ注意し至るべきを考ふるに至れり」(大拙宛)「ヘフヂングの倫理学漸く終りたり、何か国民精神發展に関する名著も出来ずや」(同)

行  
西田「實在論」を印刷  
常盤大定『印度文明史』  
日本社会党結成

一九〇七年  
明治四十年

三十六歳 「教師の嗜好」(日本及日本人) ほか  
この頃、「不平半分ノンキ半分に此歳を送るかと思へば嘆又嘆」とある

西田肋膜炎を発す(一月)  
大日本仏教徒大会(浅草本願寺)、四月市内各地で演説  
救世軍ブース大将来日  
西田「知と愛」(精神界)

一九〇八年  
明治四十一年

三十七歳 京都第二中学を退職(三月)  
京都帝国大学学生監となる(六月)  
「中学校修身教育に対する難聲」(教育学术界) ほか

西田、四高転任運動をこころみる  
「純粹経験と思惟、意志及び知的直観」(哲学雑誌) 八月  
天理教独立  
北条、萬国道德教育会議のため渡英

一九〇九年  
明治四十二年

三十八歳 第三高等学校教授を兼任  
山本、西田、鈴木、三名歓談(山本宅) 四月  
「湘南懐旧」教師及び校長論(教育学术界)  
「仙俗論」(日本及日本人) ほか

鈴木大拙ヨーロッパより帰国  
西田、山本、学習院の教授となる  
西田「宗教論について」(丁酉倫理講演集)

一九一〇年  
明治四十三年

三十九歳 『中学修身教科書備考』(光風館)、この年、時評多し

友人、藤岡作太郎死す(二月)  
西田、京都帝国大学へ転任  
大逆事件おきる(六月)  
北条、清国へ派遣される(七月)

一九一一年  
明治四十四年

四十歳 「青年の最大野心」(地方青年)  
「鍛錬教育」(太陽) ほか、時評多し

西田『善の研究』一月  
鈴木、ピアトリス・A・レーンと結婚、小石川に住む、「自力と他力」発表  
辛亥革命おこる(十月)  
鈴木、スエデンボルグ協会の招きで渡英(四月)  
友愛会創立(八月)

一九一二年  
大正元年

四十一歳 『静修書目答問』(半文館)  
「教育者の聲」(日本及日本人) ほか、時評多し

一九一三年  
大正二年

四十二歳 第三高等学校教授(兼任)を辞す(八月)

北条、東北帝国大学総長となる(五月)

一九一四年 大正三年	四十三歳 京都帝国大学 学生監として、新総長 山川健次郎（東京と兼 任）の部下となる 『大正女子修身書巻一 〜四、上級用』（弘道 館）	第一次世界大戦おこる （七月） 西田、「宗教について」講 演（京都大学）（八月）、 「自覚における直観と反 省」の連載がつづく（大 正六年まで） 鈴木「ニュー・イースト」 誌に禅の論文を連載 西田、「新理想主義」を講 演（京都哲学会）（五月） 鈴木『神慮論』（和訳） 出版（丙午出版社） 北条、上京して三々塾出 身者と会合（十一月）	一九一六年 大正五年	四十五歳 姉るい、妹外 代死す 「師範教育の難関」（小 学研究）、「春風録」（京 大学友会誌）ほか	北条、多忙な公職の身に ありながら瑞巖寺盤龍師 による提唱接心の時を得 る（六月・九月） 西田「心の内と外」を 「無尽灯」に寄稿、ほか。 鈴木、学習院寮長となる 『禅の研究』（丙午出版 社）その他 インド詩人タゴール来日 す 「宗教研究」宗教研究会 機関誌創刊 北条、学習院長となる （八月） 北条、尚志会懇親会席上、 高等師範と学習院の教育 方針の近似を述べる（九 月） 西田の哲学研究活動活発 西田の母死（九月）
一九一五年 大正四年	四十四歳 京都市吉田町 の大学官舎に居住 『大正女子修身書備考』 （弘道館） 「少年義勇団の目が」 （教育界）ほか 御大典参列に来京した 北条とわらじやにて歓 談（西田・岡田良平ら 出席）十一月		一九一八年 大正七年	四十七歳 北条に招かれ て学習院教授となる （三月）。修身哲学担当、 学習院官舎に住む 『大正中等修身備考』 （弘道館） 学習院寮長・総寮長事 務取扱い	

一九一九年 四十八歳 学習院総寮長  
大正八年 この間、北条・鈴木との関係密となる

この頃、教育・道徳に  
関する評論多し「教育  
時言」ほか

一九二〇年 四十九歳 北条の学習院  
大正九年 長辞任により学習院教  
授を休職となる(四月)

北条に殉じて辞任を決  
意し学習院会議の席上

「：既往事業ト方針ト  
ヲ明了ニ説明シ満場ヲ  
圧スルノ概アリ群鶏中  
ノ一鶴ト称スベキナリ  
：」と北条に評せられ  
る(北条三月二十四日  
日記)

文部省より欧米学生生  
活状況調査を囑託され  
る(六月)  
七月欧米に出発  
八月三日、アメリカ着  
十一月英国、十二月和

大戦終結(六月)

北条、仏教青年会維持会  
員となる(六月)

鈴木、師積宗演遷化(十  
一月)

西田の妻病床につく

西田、哲学著作のほか「宗  
教の立場」の講演(竜谷  
大学)(十二月)

森戸辰男筆禍事件(一月)

北条、学習院長を依願免  
官となる(四月)

西田「美の本質」(哲学  
研究)

西田の長男死去(六月)

賀川豊彦『死線を越えて』  
刊

北条、山本の海外視察に  
つき種々努力する

北条の日記に禅の記事が  
時おり見える

貴族院議員(九月)

一九二二年 五十歳 ヨーロッパ諸国  
大正十年 をまわり帰国(七月)

・独・仏

一木喜徳郎より根津財  
団設立の武蔵高等学校  
教頭就任の交渉をうけ  
る(八月)

「顧東」(加越能時報)

『わが民族の理想』(弘  
道館)

道館)

一九二三年 五十一歳 武蔵高等学校  
大正十一年 教授兼教頭(一月)

『二十六年』頒布『若  
い教師へ』『訓練の四  
理想』(教育研究会)

「現時に必要な徳育の  
目的」(教育界)ほか

西田、哲学著作のほか、  
講演「認識論」(京大講  
演会)(八月)

鈴木馬佐也死去す(十二  
月)

北条「：各肝胆ヲ知ルノ  
一友ヲ失フ、真人寂莫ヲ  
感ズル思ヒニ堪ヘズ：」

西田、講演「カント倫理  
学」(信濃哲学会)(一  
月)、ほか哲学論文多数

一九二三年 五十二歳  
大正十二年 関東大震災(九月)

西田次女発病(五月)、家  
庭内に不幸つづく  
鈴木、大谷大学教授とな  
り(西田、佐々木月樵ら  
のすすめ)、京都移住(四  
月)  
西田「真善美の合一点」  
(哲学研究)(九月)  
「イースタントブデイス  
ト」刊行(東方仏教徒協  
会)  
北条、肺炎を発す(九月)  
鈴木(大拙)旧臘より病  
後静養(鎌倉)  
西田、哲学著作のほか、  
講演「認識論」(京大講  
演会)(八月)  
鈴木馬佐也死去す(十二  
月)  
北条「：各肝胆ヲ知ルノ  
一友ヲ失フ、真人寂莫ヲ  
感ズル思ヒニ堪ヘズ：」  
西田、講演「カント倫理  
学」(信濃哲学会)(一  
月)、ほか哲学論文多数  
関東大震災(九月)

一九二四年 五十三歳 東京市外野方町に転居

一九二五年 五十四歳 『新訓練論』 (教育研究会)

大正十四年 教師における真理追求の熱心さが生徒の心を動かすと、教師の自覚を望む：(一月)

一九二六年 五十五歳 『新国民作法』 (教育研究会)

昭和元年 「古典主義的教育と現代思潮の傾向」(我観)ほか

一九二七年 五十六歳 「節度と筋肉」 (教育時論)ほか、評論多数

昭和二年 五十七歳 『中等教養卷一〜五』(弘道館)

一九二八年 「京大を去った西田幾多郎博士」(賀越能郷友会誌)で西田との友情をつづる

昭和四年 五十八歳 『学制改革論』 (教育研究会)

西田「内部知覚について」(哲学研究)ほか

関東大震災で倒れた円覚寺正伝庵復旧す(二月)

西田、妻死去(一月)

北条、早川千吉郎氏追悼会に出席(六月)

「働くもの」(哲学研究)鈴木『百醜千拙』(中外出版)

山川健次郎、武蔵高等学校二代校長となる(四月)

西田、講演「意識の問題」(東大)ほか

鈴木『随筆禅』(大雄閣)ほか英文禅書

西田、京大を停年退官(八月)、「叡知的世界」(哲学研究)その他

鈴木、セオソフィカル・ソサイエティに関係

東大新人会解散、河上肇、京大辞職

北条死去(四月)七十二歳

『中等教養備考』(弘道館、「勤勞教育の意義」(教育春秋)ほか

一九三〇年 五十九歳 次兄哲万死亡(一月)

『勅語四十年』(教育研究会)

「復興帝都の教育所見」ほか

一九三一年 六十歳 「思想問題の一方面」(東洋文化)

西田幾多郎編「廓堂片影」(東京朝日)ほか

「…自民族文化の内的要求に依じて外来の刺戟をとる。かくて各民族特有の文化発展を見る…」(九月)

武蔵高等学校長事務取扱いとなる(四月)

金沢市宝勝寺に葬る(六月)

西田「一般者の自己限定」(思想)

「北条先生に始めて教を受けた頃」(尚志)(十月)

北条を顕彰する記念碑建立される(金沢神社境内)(五月)

鈴木、朝鮮へ旅行(八月)『禅とは何ぞや』、『宗教経験に就きて』出版

西田「表現的自己の自己限定」(哲学研究)ほか論文多数

米価暴落

日本農民組合結成される(一月)

山川健次郎死去(六月)

西田、編者となって『廓堂片影』(教育研究会)(六月)

西田「永遠の今の自己限定」(哲学研究会)

満州事変(九月)

一九三二年 昭和七年	六十一歳 「公民科の設置からして我国教育界の思想傾向を論ず」 〔公民教育〕 〔農村問題と学制〕(東洋文化)	日本ファシズム連盟創立(一月) 西田「私と汝」(哲学)ほか論文 同『無の自覚的限定』十二月 鈴木『敦煌出土神会録』解説ほか 西田『哲学の根本問題』ほか、夏・冬を鎌倉に過す 鈴木『禅の真髓』(英文豊田和訳)ほか 西田「弁証法的な一般者としての世界」(哲学研究)その他 鈴木、大谷大学より学位、仏教研究のため中国、朝鮮にわたる(四月) 西田「行為的直観の立場」(思想)(七・八・九月)ほか 鈴木「日本人の気質と空」講演(民族文化協会)、私家本『敦煌出土少室逸書』刊行 西田「論理と生命」(思想)
一九三三年 昭和八年	六十二歳 「大学制度の小改正」(東洋文化)ほか	
一九三四年 昭和九年	六十三歳 破瓜翁と称す 「鈴木大拙と大乘仏教の世界紹介」(郷友会誌)その他 鈴木・安宅弥吉両者の友情にふれる 六十四歳 慎独寮の額、「克己復礼」について語る(七月)	
一九三六年	六十五歳 武蔵高等学校	
一九三七年 昭和十二年	六十六歳 「修身教師」(日本文化時報)ほか	
一九三八年 昭和十三年	六十七歳 「官僚独善の意義」「現下学制上の二枢要問題」(東洋文化) 「静的調和と動的調和」ほか 「：我々は民族に対する貢献を通じてこそ世界に奉仕することができる：」(武蔵十四回卒業生の回想による) 六十八歳 「過去現在のわが教育と義務」(東洋文化)ほか、多数	
一九三九年 昭和十四年		鈴木、世界信仰会議参加のためアメリカ經由渡英(六月)各地で講演十二月帰国 西田「続思索と体験」(五月)、「行為的直観」(思想)(八月) 鈴木、臨済学院教授、『禅と念仏の心理学的基礎』(和訳)刊行(大東出版社) 大陸に戦火広がる 西田、連続講演「日本文化の問題」(京大友会)その他、論文多数 鈴木、英文『日本仏教』ほか
		西田「哲学論文集第三」鈴木、ビアトリス夫人死去(七月) 『無心ということ』(大東)

<p>一九四十年 昭和十五年</p>	<p>六十九歳 校友会雑誌に 根津嘉一郎氏を追悼す る(三月) 「慎独再説」ほか 「藤岡博士の思い出」 をかたる(国語と国文学)</p>	<p>出版)ほか 武蔵高校設立者、根津嘉 一郎死去(一月) 西田、鈴木著『禅と日本 文化』の序文執筆(八月)、 「ポイエシスとプラクシ ス」(思想)</p>
<p>一九四一年 昭和十六年</p>	<p>七十歳 「槐安録(一)〜 五」(宝生)その他 西田、鈴木と共に対談 してレコードに録音す る(二月)</p>	<p>鈴木、禅文化国際研究会 を設立、『盤珪の不生禅』 (弘文堂)『禅と日本文化』 (岩波)その他多し</p>
<p>一九四二年 昭和十七年</p>	<p>七十一歳 七月十二日夜 死去(狭心症) 武蔵高等学校校葬 後に遺稿集が出る(昭 二十六・四十一)</p>	<p>日米開戦 西田、文化勲章受章『哲 学論文集第四』 リュウマチを病む(十月) 鈴木『盤珪禅師語録』校 訂、『禅の諸問題』ほか 多数 西田、山本のため弔詞 「山本晃水君の思い出」 (武蔵)(十二月) (以下略)</p>

下敷きを作製する心算で、あえて掲載した。後日を期してより  
精細なものを出したいと思う(山本の年齢算定は満年齢によ  
る)。

年譜作製には、『晃水先生遺稿・続』に掲載の年譜を参照し、  
『廓堂片影』『西田幾多郎全集別巻Ⅵ』(岩波旧版)、『回想鈴木  
大拙』(春秋社)所収の各年譜によるところが大きい。いまだ  
不備や誤りのある点が多いと思うが、紙面の都合もあり今回は

晃水・山本良吉の宗教観(松本)